

則爲城、城成則飛食人一子、其他或夾或挑、就近則食之、不能飛食也、といへるによく似たり、日本紀に城をさしと訓るところあり、韓語也、然ればむさしといふはすなはち馬城か、

〔松屋筆記 九十二〕六指、十六六指指我、擲石

今世六指、また十六六指などいふは、運歩色葉集牟部に、六指ムサシと見ゆ、六方かけて指ゆるの名なるべし、略中六指も六指驅にて、其方を驅駒の心にや、

〔物類稱呼五語〕十六むさし、京江戸共に、十六むさしと云、中國にてむさしと云、上野下野邊にて十六さすがりと云、陸奥にて辨慶むさしと云、信濃にてさすがりと云、

〔安齋隨筆 後編 十四〕一八道行成 武州崎玉郡邊にてサスカリといふ、十六むさしといふ物を十六サスカリといふ、是ヤスカリ歟、略中十六むさしをば牛追につさといふ、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕今その盤〇十六の三角なる處を牛部屋といふ、牛追ニツサの名ある故なり、〔和漢三才圖會七嬉遊〕八道行成 和名夜佐須加利、今云無佐之、

按、八道行成、不知其始、十六士卒圍一力士於中攻之、力士行八道、規二子有間者、直行掖左右屠之、故要相聯、不能坐、喰、故頻逐之、被逐失行道、則力士斃、

〔安齋隨筆 前編 十四〕一八道行成 和名抄雜藝具に、八道讀夜佐須賀利とあり、今も田舎にてはすかりと云、ヤサを略して云なり、江戸にては十六ムサシと云、十六は子馬の數十六有、親馬を除て云也、ムサシは馬指也、マとムと音相通ナリ、十六の馬を指すと云事也、將碁をサスと云に同じ、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕寶曆十三年の畫雙六大坂版六道をジャウロクムサシとありて、畫は辨慶が七道具をかけり、是十六むさしなり、略中思ふに昔むさしといひしものは、十六むさしの馬の類すくな

きものなるべし、

〔倭訓栞 前編 三十一〕むさし略中 嬉戲の具にいふは、八道行成の類也、六指の義なるべし、石六ツ

六むさし